
泥棒が執事でどーすんだよ！？

飛焰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泥棒が執事でどーすんだよ！？

【著者名】

ZZード

ZZ662F

飛焰

【あらすじ】

俺の名前は夕霧和哉……。もうすぐ二十歳ともあろう俺の職業とは『泥棒』。そんな俺が……なんで執事なんかやるんだよ！？【オレと死神？！】を読んでたらもつと楽しくなる！そんな番外編的なストーリーです】

(前書き)

焦つて書いたので……マジ失敗です。

俺の朝は意外と早い。四時起きが少し寝坊と言う感じだ。前とは生活のペースが逆転している。朝起きてからまずは夕食の材料を地下から出して、下拵えをして素早く作れるようにする。

そしてここからが本当の戦だ。勇者装備一式を持って東京ドームくらにあるんじゃねえ？ といつくらいの広さの部屋の掃除を始める。窓際の埃や、なんか変な絵が入った額縁も細かく掃除をして行く。

これをやつてぐだけで、すでに時刻は八時を回ってしまう。掃除の最中に寝坊助を起して朝食を用意させて食べさせたから、十分間に合ひ時間帯だ。

俺は素早く頭巾などを取り、武器を閉まつてから、スーツを着なおす。当然の事ながら洗面所で髪を整えたりしてから、下の階にある車のキーを取り出して、外に出る。

車庫に素早く向つて、玄関前に黒塗りのリムジンを運んで、俺はすばやく食堂の方へ向つ。

「お嬢様！ 速く学校へ向いましょうーー！」
「スー……。スー……。」

…… いの野郎、叩き起してやるつか？

つたく、なんで、俺がこんな事をしねえといけねえんだよ？

そうだそうだ、師走に入る前の事だったな…… アソ「ひぐんからか？」

* *

草木も眠る丑満つ時。その中で俺を見てるのは寒空に輝く満月とその回りにある幾つもの星々のみ。黒い服に身を包まれた俺は闇の中でのみの忍者。

ハリガネさえあれば……、ほら、この通り。

鍵の繋つた扉もお手の者　鍵を開けた扉を静かに開けてそのままにしておく。風とかでバレるかもしけねえが、今日はまったく風がない。緊急時の素早い出口の確保もOKだ、でもって、窓の鍵を開けて無用心だつたという事にする。

さて、仕事だな。

茶の間まで普通にあるて行く。箪笥やTVと繋つた一般家庭にあるようなものを眺めて獲物を探しておぐ。箪笥の中か？

いいや？ それは罷だろ？。……なら、金がありそうな場所は……？

テーブル、長椅子など茶の間を隈なく見る。

「……？」

なんだ？ 箕笥アソコと壁の隙間が大きいな。腕ぐらい入るんじゃないか？

なるほど、そこに隠してるんだな？

俺は手を通して手探しで探す。

神経を研ぎ澄まして手の感覚に頼る。そんな手に一つの正方形の紙みたいな感触が触れる。そつと、それを止めているセロハンテープを剥して取り出す。

小奇麗な茶封筒だ。これが、俺の標的。

箕笥の中をバラバラにして、めぼしい物を少しだけ持つてわかるように箕笥の1段を少しだけ開けておく。これで気が付く筈だ。

窓の鍵の開け閉めの不注意で入られて盗られた。警察はそうなればなかなか動かないからな、実際はな。ただ、気をつけてくださいというだけで……な。

さあてと、おさらばだな。今後は俺みたいな奴から気をつけてくれよ？

＊＊

とある路地裏に一つの隠れ家的な店がある。その中には田つきの悪い「ロツキや薬中の野郎とかがうるさい」所だ。そこで俺は力 ウンター席に座つてゐる男と向かい合つてゐる。

男は優秀な情報屋。

「コレが、ターゲットの情報だ」

情報屋から投げ渡された情報に軽く目を通す。それには大よその間取りや家主の情報などがファイルされた紙。大仕事の際にはこう いう情報屋というものを基本、利用する。

モチロン、法律上許されなく非公式な存在だ。

ファイルも軽く目を通した後で閉じる。そして懐から膨れ上がつ た茶封筒を投げ渡すのを情報屋は掴み取る。封筒を開き福沢諭吉の 数を舐め回すように数える。

別にその後の言葉には興味のない俺はゆっくつ歩き出す。

一週間だ……。決行する……。それで、行こうか。

＊

*

師走である。街は速めだがクリスマスの色を濃く出している。クリスマスツリー や、子供達が楽しそうに話すサンタさんについての会話。

そんな俺は鳥栖深県立の病院……の前にいる。視線の先にあるのは先日

Intensive Care Unit

つまり、ICU（集中治療室）に運ばれた少女の居た病室だ。

100円の使い捨てライターに火をつけてタバコに火をつける。タバコつてもスカスカで味もクソもないものだ。口からタバコを放して大きく息を吐く。

……大丈夫だから。兄ちゃん何としても頑張るからな。

……どんな汚い遣り方でも、俺は……！

再びタバコを咥えて歩き出す。今日さえ成功したら……なんとなる。その為に下調べもした。12月2日……つまり深夜、勝負だ。絶対……なんとかするから。

必ず。

「夕霧さん！」

歩き出そうとした俺を止めたのは、ナース服を着込んだ女性。少し幼さと初々しさがあつて去年入ったばかりの新人の看護婦さんだ。確か名前は……水沢瞳暉さんだ、愛称はひとちゃん。なにかと人を心配してくるお節介な人だ。

今日の本題だつて本当は……。

「来てたんですね、愛華ちゃんの所に行かないんですか？」愛華ちゃん待つてますよ

「いいんですよ、どうせ余る状況じゃないんでしょう？」

「そ、それは……」

彼女の瞳が曇る。名前とは正反対だな。瞳が暉くから付いた名前だらう。

「いいんですよ、わかつてますから」

タバコを口から放して紫煙を吐く。その光景を見てか思い出したかのように田を輝かせて彼女は何時も恒例な言葉を発しようとほら、大きく息を吸つてえ……。

「あ、タバコはお身体に悪いんですから、やめてください……。それに、夕霧さんは」

「イヤー、なかなか止められなくて」

瞳ちゃんの言葉を、俺はふざけた口調でそつと言つて切る。不満そうにみるこの人は無視してだがな。俺は、別にタバコなんか好きでもなんでもない。止めようと思つたらやめれる。だけど、俺は止めない。早死にしても何をしてもいい……だから、俺は……。

「はいはいは、瞳ちゃんは職場に戻つて

「“ひとちゃん”じゃなくて瞳暉です！ それに、夕霧さんは歳下でしょ……。」

憤怒する瞳ちゃんを押えておく。くそ、二十四歳だからって威張りやがって。子供を讃めてるンじゃねえのか？ つーか、絶対に精神年齢低いだろ。

「十八のガキを襲つても意味がないでしょ？ 職場に戻つて「うう～～～」

「この人は……！ 本当に二十歳を過ぎた女性なのか？」

「後で来ますから、職場に戻つてくださいね」

「は～い」

そう言つて戻る馬鹿を見送つてから、タバコを投げ捨てて歩き出す。ここに来たのも決意を固めるためだ。

俺の名前は夕霧和哉。ゆうぎりかずや 十八歳。身長一七五。体重六四。職業——

棒。

泥

「テケーな……。」

白い吐息を落して、田の前にある『かい屋敷』を眺める。灯りは消えて主無きその屋敷は鳥栖深の東部で町、青雲町で最も大きい屋敷だ。小高い丘に建てており海やら何やらが見渡せるいろんな意味で絶好のスポットである。

ただし、いまは夜。朝や夕焼けに見える美しい世界とは違い、まるで死へさそうかのように黒く深い。打ち寄せる波の音は無気味で仕方ない。

いろんな意味で地獄だな。

俺は二ツト帽を深く被り軽く準備運動をして入り口の玄関に近づく。

「さあて、ショ一の始まりだ」

静かに、そして冷酷に俺は宣言をする。泥棒暦五年のベテランを嘗めないでくれよ？

＊＊

*

……ウソだろ？

評し抜けだつた。こんな豪邸なんだから執事（まあ、元から少ないつてわかつてたけど。）もいねえし番犬（犬アレルギーあるつて聞いてたが）もなんもないし、ましてや罠なんか（そりや、レーザーとかあつたらやだけど）ねえ。それに赤外線もなんもそれらしいものはねえ。

なんなんだよ？

本当に評し抜けだつた。だけど……内部に潜入したわいいが何処から調べれば？ それよりも一体全体俺は何処を歩いてるんだ……？

待て。

ちよおおおおおおおと、待て。

まさかだけどよ、まさかなんだけどよお？

俺つて

迷子なの？

う、ウソだろーー！ そんなんで捕まつてみるよー。【泥棒、家で迷子になり逮捕！】なんて新聞かなんかで出たらどうすんだよー！ スゲー馬鹿じゃねえかーー！

……俺は捕まるワケにはいかねえんだ。

愛華の為にも俺は……どんな色にも染まる。

そして、親父と御袋を……殺す。

「ああ、そうだ。やるんだ。やるしかないんだ……」

決心？ そんなものとっくにして来ただろ？ 例え捕まつても哀しまないよう兄らしい行動もしてないんだ。愛華からしたら赤の他人でしかない。俺が捕まつても……何も感じない。

感じてほしくない。

あんな兄貴なんか居なくなつて良かった。そう思ってくれればいい。実際に愛華の反応は素つ氣無いし土産物のリンクゴを投げられるし。なにかと言葉の暴力もあるしあ。

あんな元気だつついのに、なんで……。

クソが！！ なにやつてんだ？ 大事な仕事なんだ……！ 私情を持ち込むんじゃねえ！！

田を見つて冷静になれ……。落ちつくんだ。そう、深呼吸して……田を見開け。

「よし、行くか」

神経を全身に行き渡らせる。

俺は捕まらない、闇は影を隠す存在だから。

長い廊下を渡り、五年のキャリアを活かして部屋の構造を想像する。間取りや歩き回つて大方の形を把握する。そんな中で俺がいるのは、広間つーか、ダンスホールのような場所だ。これは部屋の中核部である。ここまで来るには少々入り組んだ構造となつている。

そして、四隅には職員が止まるような部屋があり、まるで中性的ヨーロッパな感じである。

この屋敷の主が寛ぎそうな場所は大方みてきたつもりだ。なら…？ アソコか？ 主が寛ぎそうな場所は違つたし、第一、寛ぎそうな場所は違うな。

一般家庭にソレがあるのは何時でも金を出せるためだ。わざわざ財布を出さなくとも棚から出せば済むからだ。

しかし、金持ちにそんな必要はない。

方程式は見えた。^{ルート}^{アンサー}答えは『銀行』だ。

ははは、そりや当然だな。金持ちがそんな風にするわけねえからな。こうなりや、光物とか盗むしかねえな。金品とかは俺はあんまし盗みたくねえんだよな。

光物つてのはその人の思い出が詰つた者がある。親の形見。結婚祝いに大切な友人から貰つた物もいろんな大切な思い出が詰つた物。

それを、俺は一回盗んでしまった。表で捌くと警察が盗品を嗅ぎつけるので、俺らは裏のルートで捌く事が常識だ。それを盗んだものを俺は捌いてしまった。噂好きなバーさんの会話を盗み聞きして聞いたんだが。ネックレス獲物は死んだ母さんの形見でそれを失った事で倒れたというのを聞いた。

俺は、始めて「後悔」をした。前までは『生きるために仕方ない』と自分に言い聞かせて罪悪感から逃れていた。だけど、稼げばまた手に入るお金とは違つて、思い出のつまつた宝石は違つ。買ひなおせばいいといものばかりでもなくて……。

俺は罪悪感に取り憑かれそうになつた。

でも、親に捨てられて、中学校もとある理由で行けなくなつて何処にも働けないで俺は泥棒という道しかなかつた。

幼くて身体の弱い妹を養うにはそれしかなかつたから。児童保健所に連れてかれると思つていても誰も見てみぬフリだ。というよりは……みんなウチを忌み嫌つてるからだ。

いいや、昔話なんかどうでもいい……。非道になれ。

夕霧和哉。これは、非道にならないと駄目なんだ。

少し昔の事を思い出していたら、目の前には職員用のとは一回り大きな扉があり、俺はそれが主の部屋だと直感する。慎重に扉を開ける。

そして、広がつた光景に俺は啞然とした。

「…………は？」

「何処だろう？ なに？ 一見高級そうに見えるけど中は貧乏人の家みたいな？」

状況を語つならそんな感じだ。ボテのコンソメ味（俺はうす塩派だが）や、なんやらの御菓子の空が散乱し、本や雑誌もなにがなんなんやら。更には捨てはいけないような重要な書類らしきもの（一瞬だが重要つて見えたような？）。そして、衣類までが……。

「ランジェリー……？ ！？ 何を取り乱してるんだ？ 俺は！」

「お、落ちつけ。俺よ……。」

ピンクのランジェリーで取り乱すとは甘いな、俺……。くそ！」

「…………」

「な？ なんだ？ 血が騒ぐ。泥棒の血は騒がないのになんて俺は……。」

「主夫の血が騒ぐんだ？！」

【主夫】奥さんの為に命を賭けて炊事洗濯などの家事全般をこなす夫達の事だ。そして世界に数人しかいない選ばれた存在なのである！ 例）荒木龍一、雨宮和也、月見優貴。

「おい、そいつら奥さんいねえだろ？」

だ、だが、主夫の異名はあるがよ……？ つーか、なんでだ？

それいぜんになにを俺は本を片付けてるんだ！？ 身体が勝手に動く。だ、駄目だ……こんな汚い部屋なんか！……メイドもメイドだ！ いつたい、何をやらかしてんだ！！

俺の頭の中で、某起動戦士みたいに種が割れた。

まずは雑誌だ、この散らばつた物を一つに纏める……ン？ なんだよこれ、号がバラバラじゃねえかよ。ちゃんと毎週買うなら毎週買え！ もしくは毎月なら毎月買つてろ！…！ くそが、ペットボトルは分けるのはめんどくだから一ヶ所に纏める。

ええい！ こつ恥ずかしいから衣服を脱ぎ捨ててるンじゃねえ！…！

の執事？

第3章・今日から貴方

「ふう、綺麗になつた……」

このクソ汚い部屋で格闘する事數十分。どうだ！？ 見違えるほど美しくなつただろう。ふふふ、やはり長年家事をやつて來た事だけはあるだろう、本は一つに纏めて、服も皺は最大限直してから整えている、菓子の空はちゃんと捨てたし、この程度で見違えるほど

美しくなるとは。

……。どうした？ みなさん？ え？ 何か忘れてないかって？

忘れるわけないだろ？ 僕は泥棒しに入ったんだ。実は掃除をしながら金目の物を探そうと思ってたんだが…………スッカリ忘れてたぜ。一つの事に集中しすぎと周りが見えなくなる性格をなんとかしないとな……。いや、俺って天才だから？

ハハハ、そのツツ「ノリ」は無しだぜ。

自分で哀しんでるから。

「さて、何処から手を……？」

手を額に添えて綺麗に片付いた部屋を見渡す。ふむ、大体の物の場所はわかったから……やはり気になるのは枕もとの棚にの上にある小物入れだな。

また、思い出を傷つけるのか？ 心の中で誰かが言つ。

思考は遮られ前が見えなくなる。俺の何処かにある罪悪感が言った言葉が胸に突き刺さった。

お前は、それでいいのか？ 心の内を見透かされてる感じで、俺が言つ。

……よくないに決まってるだろ！？ だけど……仕方ない事はいくつもある。

そんな言い訳で逃げるのか？ 夕霧和哉？ 何かを、諭してたよう、俺は尋ねる。

ツ……！ 俺はなんの為に決意したんだ？ 元から金を奪つたりはあつた、でも金品を奪つつもりはなかつた、少しひらりと揺らいでもいいじゃないか！？

お前は逃げてる。断言した。

……俺は、運命から逃げるぞ。抗つて抗つて抗つて……！ 覆す！！

お前の運命じゃないだろ？ 愛華の……妹の運命だろ？ 冷徹な判断を下す。

愛華は、俺が守つてやんねえといけねえんだよ！

お前じゃ無理だ。この程度で迷うなう。その言葉は俺を切り伏せる。

……何度も呟つ。冷徹になれ、俺は泥棒だ。それは、代わりはない。

……さあて、俺よ。心の準備はいいかい？

一回の大きな深呼吸。それと同じに、背後で本のような物が落ちたような音が鼓膜を突き抜けて脳内の中枢に刺さる。脳内には本が落ちたような音がエンドレスで流れる。

さあて、後ろでは多分、偉い日だ。うん、俺の勘が当つてたら……

…ふ、人生の中で俺の勘が外れた事はないんだぜ……。

やー『ぱぱぱー』 やー『ぱぱぱー』 やー『ぱぱぱー』 はー う
しーる

和哉は壊れます。

下から見るとまずは、さつきまでなかつた雑誌。ふむ、今週号と
みた。さあ、ソコから視線を上げていくと……。

「あ、あの……誰ですか?」

「…………」(思考停止)

一人の幼女が立っていた。

見た目は中学三年生くらいかな? 愛華と同じくらいだな。確か
フランスの家計つて情報屋の情報にも書かれてたな……だから金髪
なのか? 胸の成長は……愛華の方が進んでるな。第一どんだけ高
級そうな血のような深紅のドレスを(和哉の目は逝かれてます。性
格にはピンクです。)……。

む? 胸パツトをしてると見た!! Bカップギリギリだとは思
つていたがお前はAカップだな!!

和哉は壊れます。

だが、病弱で貧血で肌が白い愛華よりもノーメイクで白いとは
…。だが、口紅を上手く使ってるな……俺の目は『まかせん!!

使つてません。和哉は壊れます。

「貴方は？ 誰ですか？」

「お、俺は……」

ハツ！？ 俺は何を……何故にパンツの色は……と、まで見てい
たんだ？ 落ちつけ、どうするどうする？ とこりより、真っ先に
「泥棒」という単語が出ない！？

なんて答えば……。

えっと、家主の居ない間に普通に出て、掃除をして……あれで、
これで……ええっと……。

「お、俺は！」

そうだ、俺の方程式は見えた^{ルート}_{アンサー}答^えは……

「今日から貴方の執事になる者です！」

あ～～～～何を言ひてるんだ俺は……！
てるじやねえかよ！
てるじやねえかよ！

どうしてだ、どうしてそうなるんだ俺！？ もっとマシな答^えが
あるだろ！？

「執事…………？」

「イエス！」

何を言ひてるんだ？ 俺は？

「こらない

「へ？」

あら？ バレた？ ちょ！？ ヤベエよ帰つてすぐ通報されたら溜まつたもんじゃねえぞ。雪道だから足跡が残つちまう、こんな深夜だつたら人通りもねえし……足跡を残すことになる……。

ここで捕まつたら？

……そんなワケにはいかない！！

「だ、旦那様の命令なんですよー。」

「コレでどうだ！！

「…………？ パパの？」

お、脈あり？ よし、このまま行けばなんとかなるか？

だけど……なんだ？ あの沈んだ顔は？

だが、俺だつてコレを逃がすワケにはいかない！！

「俺は……」

「アドメを刺す！！

「貴方を守る存在だ

どうだ！ 男氣大作戦！！

111

あら？ 効果無しだと！？ それよりも……涙？ 逆効果！？

何も言つてこない？ むしろ段々と赤面していつてるんだけど……

あれ?
頬が膨てる。河を
つて!!!

待てよ、たしか家族更正つて母子家庭だつたよな、え？ 待て待て確か情報屋の情報によると父親はターゲットが幼稚園の時ぐらいい死去したつて……？

……なんで曰^ハ那様なんだよ……

解答をミスつた……。

「では、よろしくお願ひします」

は？

こうして、俺の執事生活が始まることになった。理由なんかはクソもわからないまま、ただただ、俺は彼女の複雑な表情をどうすればいいのか、無駄な自問自答をして、答えが見つかなくて、俺

も複雑な感情に囚われていた。

何かが変わらないとイケナイのかもしれない。

何処かで、不思議な俺が言つたような気ががした。

俺が……執事？

不思議な感じが心の何処かで渦巻いた。

という人

第4章・神宮園灯華梨

……俺がこの家の執事になつてから一週間ほど過ぎた。そんな時間は経つてはいないがいろんな事がわかつた。

彼女は名前は、かみぞの神宮園^{ひかり}灯華梨。神宮園までは知つては下の名前までは知らなかつた……。それと曰那様は正確には物心がつく前だから3歳になるかならないかの時なのでよく覚えてないみたいだ。

俺としてはそれで助かつたと思つてたが……なんかウソっぽい。そして、未だにわからないのは何故あんな怪しき全開な俺を雇つたかだ。

まあ、そんな事はどうでもいい……俺は逃げるタイミングがわか

らない。灯華梨を車で送った後には庭に水を巻いたりする。庭は森を抜けた先にあり家庭菜園や園芸などをやっている。手入れには軽く毎までかかる。

それが終つても毎の用意をして……くたくただから……。「ンビ二の弁当は高いから無駄に材料のあるこの家のを使ってる……まあ、そんな気力もないのに雑炊程度なんだが……。

昼飯を食つたら当然ながら朝飯と昼飯を片付けて、朝のうちに下拵えしていたものの調理を始め様にも喜びそうな献立を考えるのに時間がかかる。同じ食材からも幾つ物料理が作れる。足りない物は食在庫から取り出せば済む。

そんなこんなで調理を始めて、少し寝かせたら灯華梨を迎えに行く時間となる。灯華梨は意外にも高校1年……（まったく見えん）聖涼高等学校の生徒だ。よくもまあ、倍率が5倍にもなるあの高校に入れましたな……見るからに馬鹿なのに。

……なんでかなあ……。最近で言えば物騒になつてゐるからな……あの魔槍グングニルがボコボコにされたとかそういう情報もある、なんか蒼い炎を使う奴だつけ？ なんと御伽噺おとぎばなしな……。蒼い炎つてそもそもなんじやいな、人魂ひとだまじやあるまいんだし。

ま、そんな事はどうでもいいんだけどな……。

「そろそろ行かないと……」

くっ、仕事はちゃんとしないとイケナイ性質を直さないと……延々と逃げるヒマがなくなる。夜は疲れてるし寝てるし……。

やべえよ、怒られやがつ所だつた……くそ、灯華梨には渋渋してたと言つておくか……。ああ、冬だし乾かんえだらうな……。ストーブじや乾かないし……アイロンでやつても完全には……。

くわお……。俺じつた事が……。

和哉は正常な判断が出来ません。

「ちい、どうすつかなあ……灯華梨の迎えもあるし……」

お嬢様と洪濬物

選択するのは決まっていけるのに……どーして洗濯に傾くんだああ

馬鹿だから。

なんだ？ さつきから失礼な注釈があつたような？

ちい、これ以上待たせるワケにはいかないし……迎えに行くとしますかあ……。

さて、校門の前とこつワケなんだがどうこつ事だらうか？

クリスマス間近なのは理解してやうつ…………。どー—————
ーして、ンなにラヴラヴなカップル軍団を眺めてなきゃイケナイん
だよおおお！？

なにか！？ 新手の精神的攻撃なのか！？ ハつ裂きにするぞ！？

下校時間には間に合つたが……全然来ないんだが？

お友達と楽しく談笑か？ いや、生真面目な灯華梨からしたら時
間を守らないのはおかしいはずだ。もしくは俺を無視して帰つたか
である……。

え？ つまりは俺つて解雇？ いやいや、わざわざ車に乗つてる
んだけれど何でもそれは軽率ではないだろ？

しつかし……。遅い。

クラスで掃除中か？ しゃあねえ、覗いて見るとするか……。

確か……一年B組だつたよな……。なんだろイヤな予感がする。

……俺とて時間は惜しい……。くそ、仕方ないか。

＊
＊
＊

『野郎共ツ！――スセーリョ・予選会を結構する』
おおおおおお――――――』

..... オイ。クラスの前に着てイキナリこれとはなんだよ。全員
野郎だし、とりあえずねえな。喧嘩するなよ騒がしいだろ？ まあ、
しゃあないんだろ？ けどよ.....。

つーか、何故にミスコンの予選なんだよ？

『三年から一年それぞれ三人づつ出さなければならぬ。皆の衆、
厳選に厳選を重ねて決定しよう。

三年を代表するのはミスセーリーを一回をしてる攻守共に完璧なバランスを誇っている元、生徒会長こと阿野^{あのめい}。『力さなら我が校ナンバーワン、グラビアやらなにやらの勧誘がしそつちゅう、波^{はと}鳥雲^{りしづく}(略)』

何をやつてゐるんだ？ 高校生？ うむう、俺は高校を出でないからよくわからん。本業は勉強なんだが……青春とも云つのか？ これだけは謎だ。

一層、騒がしくなる教室は後にしておけ。…………。クラスの中がなんかヤバイ事をしてゐるみたいだ、無視の方向でいいだろう。しかしなんだらうか？　イヤな感じがする…………。

体育館か？ いや

「ン？」

「あ……」

事件だ、バレない様に侵入したつもりが生徒に見つかりました。見た目はヤンキー。

一八〇ちょっとあるくらいの身長で、乱雑に整えられた長めの黒髪、刃物のような鋭い目をして首からは見た事のない鎌のネックレスをしてる。骨折かなにかしらないがギプスを左手にして包帯で巻かれてる……喧嘩でやつたのか？

軽く恐いんだが……。

「…………」

「えっと……」

睨まないでください……！

「ア～……便所ならアツチね」

「ソコ普通の反応！？」

はツー！？ 何故に俺はツツコミを？

「…………まあ、マジメに答えるなら神宮園さんとこのスーツだな。執事かなんかなんだろ？ そんなら、神宮園さんなら体育館裏に連れてかれたたのを見たぞ。広瀬の野郎達に絡まれてた……つて、もういねえ」

体育館裏＝人気が少ない＝秘話＝卑わしい事（？）

あの親切な（？）不良には感謝だ！ お礼を言うの忘れてたけど

！－ 広瀬の野郎というくらい大多分、不良なのだろう。つか、なんたる洞察力。

ならば……！ あれ？ いろんな意味で好機？

じゃない！ だつて、約束しただろ？ 僕よ……。

夕霧和哉は神宮園灯華梨を守る存在^{しつじ}だつて。だから僕は……。

いいじゃないか、まともな仕事だぞ？ 泥棒なんかしてるよりいいじゃないか。

そんな逃げてる考え方もあつた……だけど、それじゃあ駄目なんだよ。わかつてんんだ、でも。

だから、灯華梨をその為に利用する。もとから、灯華梨の金を盗んでそれを利用するために忍び込んだんだ……表に戻つてマジメに稼ぐ？ ふん、泥棒なんて事でも裏の世界に足を踏み入れたこの僕が表の世界で光を浴びるワケにはいかないんだよ。

日本には三十万の優秀な警察が居る、そいつらから僕は逃げるという選択しかないんだ。だから僕は光を浴びるワケにはいかないんだ、浴びたらそこでまた暗い檻に入れられるんだ。

だから、灯華梨を利用する。

「はあ……はあ……。見つけた」

全力疾走して疲れるとはな……。結構、広いなこの学校。

まずは茂みに隠れ様、そして様子を見るんだ。距離は十分、……会話の内容も聞える。

『だからあら、金を貸せって言つてるので

やつぱ、ただのチンピラか、数は五人……余裕だな。

『なんですか?』

灯華梨は当然な反応をする。つーか、ヤンキーに絡まれても物怖じしないとは……。

『なんでつて……そりやあ……なあ?』

一番ひやひやひやした茶髪のあむこがピアスをした男が尋ねる。

『弟が病氣でお金が必要なんですー』

恐らくリーダー格であろう男がふざけた口調で言つ、周囲の男達は含み笑いをするのが確認できる。嘘なのは見え見えだ。それを、灯華梨は男を食い入るように見て黙る。

そろそろ、出る準備をしねえとな。

『……それでは、これを御使いください』

は……?

灯華梨が差し出したのは自分の財布。

灯華梨の馬鹿げた行動は俺の思考を奪つた。

その後の光景も会話もなにも聞えなくて頭にも入らなかつた。灯華梨の行動の意図がわからなかつた。なにをしてんだ？ あの馬鹿は？

気が付いた時には誰も体育館裏にはいなかつた。

「あ、夕霧さん」

＊＊＊

俺がベンツの前に戻つて来た時、居たのは当然、灯華梨である。その隣には先程、校内であつた不良男子。俺に気がついた瞬間に灯華梨が背中に何かを隠したような気ががしたがふれないので置こう。なんか、灯華梨が焦つてゐみたいだから、古いが交換日記かなにか？

「ア、ども」

相手から会釈をしたので取り合えず会釈して返す。

「すみません、お嬢様。少々トイレに行つて参りました」

営業スマイル。別にトイレなんかにはいつてないが俺はそれで返す。ベンツの後部座席のドアを開けてお嬢様を入れる。くそ、ドアくらい自分で開けようぜ？

「やつなんだ、それじゃあ……。ありがとうね、竜宮城」

「お～。そんじゃな」

ペコリと頭を下げる灯華梨に大してアマミヤといつ男は投げ槍に行つて振り廻りもせずに帰路に発つ。なにものなんだ？あの男？

灯華梨からは彼氏がいる的な感じのことは聞いてないぞ。

ま、んな事はどうでもいいか……。

運転席に座つてエンジンと暖房をいれる。さて、気合をいれろよゲーセンでしか運転してない男の無免許運転のはじまりだ……。

安全第一……。ふ、湾岸の霸者と呼ばれた俺がスピードをつくるんだ、出来る。

俺は……出来るー！

そんな事を言い聞かせて発進したのはいいも……俺が武者震いするとはな……。

「ふふふ」

「？ び、ビュビュビュおしましたかお嬢様？」

「夕霧さん、運転してゐ時に瞬きをしませんか？」

「安全第一ですからーー！」

余裕がないワケではないのだー！

ブラックアイスバーンだから危険だ、落ちつけ……クソオ！ 行

きは道路こんなツルツルじゃなかつたぞ！！ 集中だ集中。

「夕霧さん？」

「はい？」

余裕がないです！ ウソついですみませええええん！！！！
イジメですか？ お嬢様！？

「一段と恐い顔してますけど、なにかありましたか？」
「ツ？」

……自然と顔に出てたのか？ あの光景の事を？

恐い顔？ そうかもな、ちょっと恐いかな？

そりやそりや、内心はスゲーイラついてるからな。

金をホイホイ出せる人種にな。

「運転が不慣れなもので」

それもある、が、一番の原因はあの行動。

「ウソです」

灯華梨はそれを見抜く。信号が代わり“赤”になる。ブレーキを踏んで車を止める。灯華梨はそれから何も続け様とはしなかった。俺の言葉を待つてる素振りはなく、ただ前を見るだけ。

その間にながれた沈黙は僅かな間なのに長く感じられた。“赤”

から信号は“緑”に代わるとほぼ同じにアクセルを踏む。

「お嬢様？ アイスでも食べますか？」

そんな俺の言葉で沈黙を断つた。

＊＊＊

クリスマス間近だ。あの灯華梨の行動から一週間というワケだ。そんな中で俺は運転にも大分馴れて冬道でも平気なわけだ。

そこで俺は灯華梨を迎えて行った後で“自由時間”というのを一時間設けている。そこで逃げればいいって？ ハハ、盗むヒマはたしかにあるけどよ……ここに寄つてたら時間がなくてな。ノブちゃん……まあ、裏で捌いてくれる奴の所にいけなくてな。

シャリットと音を立てて皮を切る。きれいに切られたリングゴを丸まんま愛華に渡す。

「お兄ちゃん！ なぜカットしてくれねえんでえ！ あたしやあ病人やで！」

「愛華、お前は何人だ？」

「根っからの江戸っ子や」

関西弁関西弁。

「のウザイのはタ霧愛華。身長は一四〇ジャストで中学二年。元から身体が弱い為に病院で日常を過して、心臓の持病である。こ

んな元気だつてのに少し前はエヒコに入っていたなんて感じさせれない。

「そんだけ元気なら丸ごと食え」
「ぶー」

膨れる馬鹿を他所に俺は外を眺める。

手術は3日後……。クリスマスイブだ……。速く金を用意しないと……給料の前借りをしてあとは何時もみたいに盗みを働くんだ、それしかない。

入院の費用で今までが限界だつたけど……手術の金はどうしても必要だ。

なんとかする、大丈夫だ。クリスマス前に絶望する家庭があるかもしれない……。だけど……愛華を守る為だ。絶対になんとかする……。俺がなんとかしないとイケナイ。父さんと母さんに代わって。

「……………でね……………お兄ちゃん?」
「あ?　ああ。それは良かつたな」
「よくないー!　注射二回も刺されたんだからー!」

そりや、上手い人やヘタな人はいるさ。怒るような事じゃないだろ?

……………クリスマスか……………。

和哉

俺は普通の家に生まれて普通に家族も居て普通に学校に通つてたりしていた。

今が一〇一五年だから、俺は今年で十九だから一九九六年産ま
かな？　十一月一九日午後五時一六分三一秒、俺はこの世界に産ま
れた。

父親の名前は夕霧真佐志。ゆづきまさえ一般会社員で母親の夕霧梓ゆづきざい旧姓は姫野ひめのだ、同じ職場の同じ部署に勤める〇一である、つまりは社内恋愛だ。その二人の間に俺は産まれた。

どの家も普通でまさに普通だ。金がないワケでもあるワケでもない。そういう俺だって勉強も運動神経も普通の分類だ、ただし走るのが速いだけで普通のどこにでもいる子供だった。

子供も子供なりにベルトで変身する奴とか、五対一で怪人をリンクにするアレにも熱くなっていた。好き嫌いも普通にあつたし。本当にどこでもいる男だった。

親父は厳しい人で御袋は優しい人だった、親父に殴られてぐずる俺を慰めてくれたりした。どこにでもある家庭で俺は日常を過すはずだった（・・・）。

まあ、意味は後々わかるだろう。

俺が幼稚園の時かな？　よくは覚えてないが俺の歳から考えると
そうなるな。妹が……愛華が産まれた。俺としては嬉しいようで妹

ということでも少し残念であった、男としては弟が欲しかったからな。愛華は産まれた時から身体が弱くて病弱でもあった、両親が共働きな俺にとっては熱でうなされる幼い愛華をあやすのが日課であった。

しかしながら、学校に上ると俺は愛華の面倒を見る事が難しくなる。愛華は保育所に預けて学校帰りに俺が迎えに行く事になる。

ともなれば学校で出来た友達と放課後にサッカーとか鬼ごっこの約束はできなく不満が溜まる日常であった。そうそう、今ではこんなに捻くれてるが昔は真っ直ぐな子供だったんだぞ？ 友達も男女間けつこう居たんだぞ。

そんな小学生ライフを送つてた俺としては放課後も遊びたかったわけだ。俺だつてまだ子供だ。たまに、本当にたまにだけ遅くなる事もあった。

そんな我慢な小学校だったかな？ ま、それも愛華が幼稚園の年長になつた時までだ。

愛華が小学校に上がつた時には俺は結構自由だった、放課後は普通にサッカーしたりしてたりした。充実してると思ったよ。小学校の高学年ともなれば異性を意識するようになる。俺だつて初恋の相手はいるぞ。

楠津恵理。^{くすつ えり} 可愛い子だつた……告白する前に転校したんだけどな。

小学校六年の時かな？ 親父の金の出入りが激しくなつた。幼い愛華はお小遣いが多い事によろこんでいたが俺は素直に喜べなかつた。俺は幼くともなんとなくそなは賭け事だつて気がついていた。

だから、俺は不安で仕方なかつた。

その不安は的中した。

俺が中学校に上がつた時から愛華も気がついていたがだんだんとおかずの数が少なくなつてるのが気がついた。愛華はそれぐらいだつたけど、母さんが工夫してたのもわかつた。

そして、俺がもうすぐ中一になつて時に親父は会社の金に手をつけた。ヤバイ所に借金してるとは気がつかなかつた。そこは親父と御袋が手を回してくれたのだろう。いや、配慮だな。

親父も御袋も追い詰められた。そして、俺が中一になつた時、親父と御袋は、俺と愛華を置いて夜逃げした。愛華には俺が真実を話した。

それが、大きな間違いだつた。愛華は精神的に追い詰められた。信じてた人に裏切られたと同じなのだからある意味、当然だろう。

病気の再発に近いものだ。そうともなれば……何かと金が必要になる。助かったのは母さんが自分の通帳を置いて行ってくれたことだ。

御袋達と過したクリスマスの日に俺は母さんに通帳を渡された。最初は理解できなかつた。いや、理解したくなかった。御袋達が俺達を置いて夜逃げするなんて考えたくもなかつた。

なにが、「愛華をよろしくね」だ……逆に傷つけただけじゃないか！！

だけれども、そのお金のお陰でじぱりくの間はビリにかなつた。

だが、物には限度がある。稼ぎのない人間にとつてそれはすぐだ。

食うものも次第になくなりガス代はおろか電気、水道代が酷く蝕みボロボロの状態に追い詰められてた。愛華は病院の栄養管理が行き届いた食事をとつてゐる、入院費もある……。

本当に心身がボロボロだつた……。

一人で頑張つてゐる内に身体が壊れて行つた。筋肉痛で動けなくなつても何かをするしかなかつた。人ごみの中に紛れ込んでサイフをすつたりそんな事をして生計を経てていつた。

この時から俺は犯罪者だつた。

何度かバレて激怒したオッサンに追いかけられたりして……命かながらだつた。その時に俺を助けてくれた者は……。

当然居ない、どんな恐い思いをしてもどんな辛い思いをしても頼れる人間が居なかつた。

だから……俺が愛華を支えてやらないといけないんだ。愛華だけには辛い思いをさせたくない。愛華にだけは日常を生きて欲しい。だから、俺は……。

外道になつたんだ。

悪魔にも魂を渡したんだ。

だから……や、仮面は外そう? もう疲れただろ? 俺?

……。俺の名前は夕霧和哉。職業……泥棒。

第4章後半・神宮

園灯華梨

もう外は暗くなっていた。六時には戻る予定だ……ちょっとオーバーするかな?

少しだけアクセルを強めに踏む。

今度こそ硬く決意した物を抱えながら。

案の定ついた頃には六時を少し過ぎたぐらいになっていた。雪も静かに降り出していた。ベンツを車庫に入れて鍵を持って出る。

ふと、崖の方に視線が行く。街の街灯が視野の少しをカラフルに彩り海は漁船のような灯りが転々と先の見えない海で輝いている。聖夜の間近を表す小さな光の妖精は舞い、地にはさまざまの彩色の光が入り乱れる。

全く関係ないのだが、それだけでも何故かクリスマスが近いという事がわかった。

日付という点でもわかつていたが、こいつも騒がしくなると自然と気が付く。

この世界で俺みたいな不幸な人やもつと不幸な人は数多くいるんだ。俺だけってワケじゃない。ましてや全世界がそういうワケではない。偏狭な地なら誰もがそつだ、だが、日本という先進国でこんな人間は本当に少ないんだろう。

サンタを待ちつづける子供とかいろんな多くの人がいる。けれども、食うものがなく寒さに飢餓する人や家を失った人。それも決して少くはない。

「…………愛華のクリスマスプレゼント、どうしようかな…………」

毎回これには頭が悩まる。

一段と強い風が吹き寒気を覚える。

「さ、ふ、ツ、…！」

いそいそと俺は玄関に戻り中に入る。中は暖房が効いていて寒さが残るもののが頬にあたる暖気を感じる。だけどもその前に俺の思考は奪われる。

玄関で男が土下座をしていた。その前ではオロオロする灯華梨の姿。

土下座をしていたのはこの前のカツアゲしていた男だ、恐らく広瀬という男であろう。それが地べたにデコを付けてだ、ヤンキーだといつにこそそのプライドを捨てて。

いまいち状況が掴めないのは俺だけというワケではなくて灯華梨もだらう。どうしたらいいかわからぬ顔で俺に助けを求めてる。

いや、俺だつて困つてるんだけど……。

「取り合えずお顔を上げてください」

……。」いつ、皿が腫れてる……？ セツキまで泣いていたみたいじゃねえかよ。

「俺、ただ……」

広瀬（仮）が蚊の鳴くよつた声で呟く。聞えたのは俺ぐらいう。

「貴方のお陰で、雅哉が……弟が助かりました！――」

先ほどの声とは一転。壁敷に響くほどの大きな声で叫ぶ。涙声だ。

それよりも…………なん だつ、て？

「そうですか。よかつたですね」

「俺、アンナ言い方しか出来なくて……」

あいつ等の会話なんてどーでもいい。俺の頭の中で何を言ったのか思い出さう。そう、あの広瀬（仮）が言つたのは『貴方のお陰で、雅哉が……弟が助かりました』と言つたんだ。

貴方のお陰とはつまりは恐喝したサイフなんだろう。でも、どーいう事だよ、絶対、遊ぶ金ほしさだろ？ なのに、なんだよ？ カツアゲ

雅哉が……弟が助かりました』って？

どういう意味なんだよッ！？

……ウソだ、広瀬（仮）と俺が同じだなんて……！ それはウソだ！！

なんかあるんだよ裏に！ 人間はそういう汚いのばつかなんだよ…！ 俺みたいにそいつもいろんなのがあんだけ…！ 弟が病気だつた？ 手術をしてよくなつた感じの事を言って……どうなるつてんだよ？

普通に高校に行けるなんて俺よりも平和じゃねえか、なら親もいるんだろう？ 片親でも親がかき集めるどり？ なんでお前が集めてるんだよ？ 2人暮らしで平和？ バイトが出来るからか？

そんなの……反則だろ？ 俺は泥棒にまで手をだしてるとただ捻くれただけ？

そんなワケ……。そんなワケ……。

世界は、なんて不公平なんだろ？……。

人間を平等にしてはくれない……。

「いいんですよ、感謝しなくて。私は貴方の眼を見て信じたんですから

なんだよそれ？ 何を言つてるんだ？

田を見て？ お前は超能力者かよ？

偽善者じゃないのか？ 金持ちだからってなんだよ？ そういう風に言えるのは何かをいろんな辛い物を背負つていろんな人間を見た人間なんだよ。

「ありがとう…………！」

ああ……。そうか、それが彼女なんだ……。

偽りの偽善者。偽善者でもないのに偽善者を演じてる。

ただの、優しさだけの人間なんだな。

なら、俺は？

俺は……。そうか、見抜かれてたんだな。お前に。

「？ 夕霧さん？」

「……なんでもありません。それではお食事の時間ですよ？ お嬢様」

……上等だ。

俺は、非道になる。

タだと？

街は活気に溢れていた。12月24日。つまりはクリスマスイブである。

そんな中で俺の手には紅く（クリムゾン）の光を放つ石が握られている。宝石などの装飾ではなくて石だ。恐らくルビーの原石だと思われる。

宝石の事なんかはわからん。だが、ノブちゃんの所に持つて行けば莫大な金が手に入るはずだ。それで今日中に手術代を出すんだ…。コレを売ればツケでた入院費も返せる。

しばらくはなんとかなる！

手袋と宝石をスーツの内ポケにしまつ。

……さよならだ、神宮園飛華梨さん？

「てめえツ！…」

男の恫喝が響く。

「ぎょふあ！…」

その間、僅か秒……いや、秒もあつただろ？ 男の恫喝は悲鳴に変わった。それと同じにアスファルトに穴が空いたかのような音が響く。

喧嘩をした相手が悪かったようだがアスファルトを碎く音は尋常じやないぞ？

野次を聞いてみると、何故か
「サンタ」という単語が頻繁に聞えた。

……サンタだと？！？

やつべえ、見てみてえ……。

どうせ帰らないんだし別にいいだろ？……。気になるンじゃない
か……だけど手術には時間がない……。

だから？だから……早く金を払つて愛華と静かに暮らそうかな？

……中学も高校も通わせて……

……毎日、美味しい飯が食べて……

……愛華の笑顔を久し振りにみたいんだ……やつれた愛華の笑顔
じゃなくて……少し栄養ありすぎかな？って思つくらいの時……。

……家族で過ごしていたあの時みたいに……

……今度は一人で……ちゃんとやり直したい。

だから、今を踏ん張れ！！

「グ……、グンクニール魔槍？」

先程の男の連れであるつ男がだらしなく尻餅を付いて人差し指で
サンタを指す。

ギブスをした皿つきの悪いサンタ……。あれは……あの時のヤンキー……？

「オイ」「ハ」

学校の時とは別人みたいに声のトーンが低い。まるで威嚇。

「タバコ、謝れよ」

今、来た俺としては分かり難い言葉だった。タバコの火で衣装が焦げたワケではないようだ。

皿を配るとわんわん泣きじゃくる小さな女の子とその母親。少女の「口」には黒い火傷みたいな痣がある。そこで俺は状況を理解する。だが、その男はタバコを持っておらず。アスファルトのクレーターの中心に居る男の手元にあるのが確認された。

理不尽だ……。

「お、お俺は関係な……ッ」

「関係ない」とはサンタが言わせない。サンタは足を男の頭上に上げる。まるで体操の選手みたく柔らかい。

だが、俺にはその足が“斧”にしか見えない。

「本物のサンタに代わって……お仕置きだッ……」

斧は振り落とされた。

再びアスファルトにクレーターを作り男をやる。アレが……魔槍マジックと呼ばれる男か……。しかし……何故にサンタの格好なんだ？

サンタは泣き喚く少女に歩み寄る。母親は軽く表情を強ばらせる。

「Happy X-mas」

サンタは少女に弦くように何かを言つと、手を出す。そして指を鳴らす。すると彼の反対の手には“ポインセチア”が握られていた、冬に咲く花で花言葉は……確か「祝福」

お見事なマジックだ。少女は泣き止み恐る恐るその赤い花ポインセチアを手に取る。そして先程の泣き顔とは違い、百花繚乱する。その笑顔はまるで一面に咲く花のようだ。

サンタは細く微笑んで少女の「テ」に触れる。火傷の痕は大した事はない。

「後は、アマミヤサンタからのプレゼントだ」

火傷の個所を指で擦ると、その痕はキレイさっぱり消える。

少女も急に痛みが消えてか？自然と首を傾げる。男は立ち上がって少女に何か言うと少女は大きな声と動作で否定する。いまさら気が付いてか母親が立ち上がり男に感謝の言葉を述べてる。

「ア～。ンなのはいいですよ、オレはバイトありますから。そんじ

や

買いだしだらつか？ ミルクや砂糖が大量に入った袋を持って歩き出す。

「わたしねえ！ め兄ちゃんのおよめさんになーー。
「ぶツ！？」

サンタが吹いた。俺はその光景を呆然と眺めていた。

＊＊＊

「ノブちゃんは……まだ居ないのか？」

約束の場所……まあ、ベタに公園なんだが。ノブちゃんは居なかつた。心の内で舌打ちをしておく。

「花形信治は来ないぞ？」

「ツー？」

誰だツー？ と、いう言葉を閉まつて息を飲む。振り帰るとそこに夕日と噴水をバックにしたサンタの格好をした男が居た。夕日で顔まで確認できなかつた。

だが、どこかで聞き覚えのある声だ。

そんな事より……俺はもっと大事な事がある。ノブちゃんが来ないだと？

「そーいう恐い顔はするな警察つてワケじゃない」

といえず、安心する。だけど……。

何者だ？　コイツは？

男は飄々（ひょうひょう）と近づく。顔の輪郭がハツキリして、俺は誰なのか理解する。最近、何度も会った男だ。最初は学校で、次は先程の街角で……。

アマミヤ、魔槍^{マングニール}、全てが俺の脳内で一致した。

「まずは俺から名乗ろつか？　夕霧和哉？　オレの名はあまみやかずや

哉

第6章・和也と和

はは……。自嘲してしまってそうになるのをまた心の内に止めておく。声に出したら止まりそうにもないから。記憶を漁る。車の前でのあの男と灯華梨はなにをしてたんだ？

何を話してたんだ？

それは簡単だ。俺の身元とかそこらだり。魔槍の情報網は危険だといわれる。なら、少し調べれば警察が時間を掛けてる俺がすぐ特定できるだろう。

なによりも、灯華璃の目撃情報。それさえあれば簡単である。

「花形信治は殺された」

え……？ 言葉という重圧が襲いかかって来た。それは捕まつたとか病気とかより重たい人の死という言葉。冗談だろ？ 聖夜の昼に血が飛ぶなんて……。悪い冗談が過ぎてるだろ？

何を言つてるんだよ、このサンタは？ 幸福の福音というよりは、死を告げる使者だな……。まるで、 “死神” だ。

「イツが魔槍？ 僕には……死神にしか見えないぞ？

俺は……。

「冗談じゃない！！

「ひつちの世界の話しあはぐくとして……。テメエは何をやつてんだ！？」

死神は憤慨する。理不尽だ……俺は何をしてるかつて？

なんなんだよ、お前は……？ なんでもお見通しなんて顔をするなよ……。俺はそんな存在なんかじゃない、他人に同情なんかされたくない！！

「お前に俺の何がわかる？」「

静かに、怒りを込めて俺は呟く。コイツは……俺の何を知ってるんだよ？

「知るか」

サンタクロースは即座に返す。そりや、お見事な反射神経だ。それよりも、何故サンタの格好のままなんだよ！？ 頭の神経がどこで切れてるんじゃないのか？

だが、俺は先の行動を考える。

ノブちゃんは居ない。知人には捌けるような者はいない。ならば頼れるのは……捌ける場所を知つていてその情報が豊富な知識と知り合いが居る。

情報屋。

アイツなら……。

だが、果たして間に合つか？

「お前は逃げてるだけだ」

時間がない。もう始まる時間だ。手術室の前にいてやんないと……一時間しかない……。コイツに構つてるヒマはない。走つて、ひたすら走つていくしかない。

情報屋の所はここから近い、なんとか間に合つかもしれない。

「あ、そつそつ……これも言つておかないとな、花形信治は裏で物を捌く仕事もして更にはコレが本格的な殺された原因。花形信治は、とある裏路地の情報屋でもある」

「は……？」

頭の中が空虚になる。その言葉を聞いた瞬間に頭が真っ白になつた。どうこう事か理解出来なかつたししようともしなかつた。ただ、頭の中が空っぽになつて真っ白になつただけだ。

空虚の頭の中は知る事を嫌い知る事を欲するようになつた。

明らかな矛盾。

相反する反応。

「お前が宝石を捌いてた奴とお前が情報を仕入れてた奴は同一人物だ」

「嘘だ……」

落ちついた顔をするアイツに対して俺は先程と間逆の反応。サンタは相変わらず落ちついた顔だ。どうやら、俺の思考は読まれてたらしげな……。ハハ、なんなんだよ？ コイツは？

落ちつけよ…！ 落ちつけよ俺…！

少し落ちついた。前を見て。

「お前、もうんな仕事やめる。稼ぎを考えたら執事やるのが良いに決まってるだろ？」

「泥棒が執事でビースンだよ！…」

汚れた仕事から手を洗つて今はマジメに働いてる？ そんなキレイ事はイヤだな！ 僕はそんな人間じゃ駄目なんだよ。こんな汚れた人間が、光には受け居られないんだ！ 世界には凄まじい数の優秀な刑事がいる。一つでも証拠を嗅ぎつけられたらそこで終りだ！

神宮園という名を汚すだけだ。僕には関係ない、だけど汚れを他人に写すなんてもつとイヤだ！ ああ、そうだよ。僕は偽善者さ！ だから、そんな生き方しか出来なかつた。

俺は不幸でもいいから、妹だけでも幸せに。

俺は不幸でもいいから、灯華梨には平穏に。

そんな事を考える偽善者さ！ ただ、汚い世界を知つて自分みた
いな汚い存在には容赦はしない。同じ世界に居るんだから、でも光
がある物に……。

光に照らされた人達、汚れを知らない人達にはこうならないで欲
しいから。

でも、それは泥棒といいう行為と矛盾になる。

俺は、生きるために……。妹の為にやつてきた。

どんどん汚れていく俺を他所に元気を取り戻してくれてる……愛
華。身内が優先に決まつて。だつて俺は……。駄目な偽善者だか
ら。

でも、狙つのはへソクリとかそつこうのだ。言い訳にしかならない。

サイフも通帳も宝石も狙わないでへソクリを狙つおかしな泥棒。

「いーんじゃねえの？」

「よくない！！」

「だつて、『執事』とこう言葉はお前が選んだ言葉だ！」

言葉の重圧が俺に圧し掛かる。そして俺は言った、「貴方を守る存在」だと。俺は傷つけるだけだ。だけども俺は……。守りたい存在がいるんだ、せめて、愛華だけでも。

だつて、母さんと約束したから。愛華を任せられたから。俺は……。

方程式は見えた。

「俺の答え（アンサー）は……。俺、夕霧和哉は泥棒だ！」

「つたく……。いい加減にしろよッ！？」

遂にサンタは怒鳴る。

「テメエはよお……お前みてえな偽善者がンな汚い金を使って気持ちいいワケねえだろ！」

距離は殆どない。体格の差が分かり切つてる。

だけど、引けないんだ。幾ら正論を言われよつが。俺はーー！

「俺は幾ら傷ついてもいいんだ」

自分が毛嫌いする偽善者の言葉。だけども俺は続ける。そうしないと自分の決意が脆くも崩れそつだから。二回も経て直した決意。それを崩させられるワケにはいかなかつた。

自分でも頭の中どじつちやになつて矛盾が生まれる。

でも俺はそんなんじや駄目なんだ。

俺は……“弱くなくちゃイケナイ”んだ。

「それが、俺の“弱さ”だから…」

「なら逃げろッ…」

逃げるとは、走るといつ意味ではなく。自分から。つまりは現実逃避しろといつ事。頭では理解できたが身体が迷う。このまま執事をしたら~~安定~~は出来るだろう。費用も少しづつなんとか出来る。だから俺は思う。

本当は執事をやる事でいろんな事を勝ち取れる。

頭でも身体でも理解してるが今まで生きてきた自分が否定する。俺の馬鹿が人を傷つける恐れがあるからと~~否定~~する。

「それに…！」

一層、大きな吐息が吐かれる。その白いブレスは、俺の耳に当ると暖氣を敏感に感じる。サンタがもう一回、大きく息を吸つたのがわかつた。なにか、大切な事を言つ為に。

「神宮園さんはお前が支えるよー。彼女を支える人間はもう居ないんだよ。幼い時に両親を失つて、中学に上がる前に祖父も祖母も失つたんだ。メイドも執事も何も雇わないで一人で頑張つて来たんだ。彼女は、それをお前が支えないのでどうするんだ？ 彼女がお前に興味を示してたのはソ」「らくんにあるんじゃないのか？」

それは……。俺の言葉だらけ。

「俺は言つたんだよ。『俺は貴方を守る存在だ』って……ただ、そのは凌ぎの言い訳だつたさ。でも俺はどっちかわからねえでんだよ……。自分が泥棒か？ 執事か？」

呟く。夕日はもう沈もうとしている。時間は……もうないだろう。僅かな間と思いきや大分時間がかかったみたいだ。手術まで時間はない。

手術費は後ででいいだろう。俺は何をしたらいいんだろう？ 最良の答えはわかってるのに前に出ることができない。

ああ……。そうか。

自分が変わつてしまつのが恐かつたんだ。

「逃げて逃げて逃げて、カツ「悪い事の繰り返しで見つかる答えもある。だから、自分が思つ場所に行け……謝つてこい」

でも、代わらないといけない。愛華を養わないといけないから。

でも、代わりたくない。自分が自分じゃなくなるのが恐いから。

だから、俺は……俺が選ぶ道は……

代わるし代わらない。ただ、夕霧和哉から、夕霧和哉に代わるだけ。何も変わらないけど変わるんだ俺は。俺の名は夕霧和哉だ。ただ、それだけの変化……

俺は……行こう。

「俺は、夕霧和哉だ。雨宮和也」

「ああ、オレも雨宮和也から雨宮和也に代わった男だ……」

そうか……。コイツは俺に近かつたんだ。だけど、コイツは自分から自分に代わって自分のままでいられた。俺はそれに嫉妬したんだ。ああ、今ならわかる。俺と和也は似たもの同士だ。

名前も同じ「カズヤ」だしな。だから俺は走ろう。

何かをしないと代わらない、コレが神の試しだというなら俺は……！

受けたつてやるよ。神様とやら……俺は……代わるんだ！
けど、俺は俺のままだ。

「はあ……はあ……」

俺は玄関の前に居る。荒くなつた息を整えてからドアノブに手を

掛ける。

相変わらず玄関に入ると寒さに凍えた肌が暖氣を感じて頬を赤く染める。俺は静かに靴を脱いで居間にいるであろう灯華梨の元に近づく。

「夕霧さん、おかえりなさい」

何時もと代わらない笑顔で俺を迎えてくれる。彼女は、真実を話した後にこの笑顔でしてくれるだろうか？　いや、そんなのはどうでも良いんだ。

さあ、夕霧和哉……大丈夫か？　うん、言おう。

俺を代えるために。

俺のままである為に。

「俺……」

その後の彼等は、貴方の想像で。聖なる夜に降るのは何れか？

しかし、その日に彼を成長させたのはかわりない。

自分を代えても代わらない、その本当の意味は？　ありのままの

自分。

貴方は、ありのままの自分ですか？ それとも……？

光は永久ではなく、闇を連なり永久ではない。どうやらも縁いものである。

＜オマケ＞

瞳暉「わ、私……当初はヒロインだったのに？」

作者「いや～。ワンキャラ風情が何を抜かすか

瞳暉「…………この外道ヘタレクソ馬鹿作者が……」

作者「ワンキャラが！ 泣け！ 嘘け！ 馬鹿」

瞳暉「ばーか！ばーか！ばーか！……」

作者「ふ、評判が良かつたら連載化だぞ？ そんな事を言つたら君をイレイサーするけど？」

瞳暉「な、なんて外道な……！」

作者「この世の神を侮るなよおおおおおおおおおおおおおお……！」

和也「死んでろ」

作者「や、やめえ……。その関節はそつちには曲がりませんッ……」

＜オマケ2＞

和哉「お嬢様？ そこにあるケーキは一体……？」

灯華梨「ふえ！？ そ、それは、そその……」

和哉「？ クリームの塗りが乱雑ですね……」

灯華梨「す、すすすすみましょん！！！」

和哉「へ？ ま、まさか……お嬢様がお作りに！？」

灯華梨「夕霧さんが居ない間に……雨宮君に頼んで作り方教えてもらつたの」

和哉「し、失礼しましたあああ！！！ な、なんたる芸術！！！」

灯華梨「へタなのはわかつてます……」

和哉「うつ……。お嬢様、ゴムべらを貸してください」

灯華梨「は、は」

和哉「クリームは」つ塗るんですね。」じつしたらムカも出来ません」

灯華梨「あ、あの……／＼／＼／＼」

和哉「あ、」

（背後から抱くよつた格好になつた和哉でした。）

(後書き)

血已満足で終ります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7662f/>

泥棒が執事でどーすんだよ！？

2010年10月9日19時27分発行